The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	TA (Teaching Assistant) の声　サイバーメディアフォーラム no.13　CALLシステム
Author(s)	
Citation	サイバーメディア・フォーラム. 2012, 13, p. 67-68
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/70341
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ICT 環境による教育イノベーション
—iPad や Facebook を活用した授業を TA として見て—

西村 玲和　（大阪大学 大学院言語文化研究科 言語文化専攻）

1. はじめに

私は、火曜 1 限・木曜 2 限に竹蓋順子先生の授業を、火曜 3 限に岩居弘樹先生の授業をお手伝いさせていただいている。火曜 3 限「地域言語文化演習（ドイツ語）」および木曜 2 限「実践英語」では全学教育推進機構からの TA であり、また火曜 1 限「言語技術研究」では大学院開講授業での技術補佐員という役職である。後者は男女共同参画推進オフィスの実施している研究支援員制度の助成を受けて実現されたものだ。主に授業時間中に関わらせてもらっている TA でももちろんだが、研究支援員制度の助成を受けた授業支援では特に、授業時間の内外を問わず全面的に関わることができるため、授業づくりに深く関与するという非常に貴重な体験を得ている。

これらは全学の英語やドイツ語の授業、それから言語文化研究科の大学院開講という位置づけの授業と一見バラバラに見える授業群だが、サイバーメディアセンターの CALL 教室で実施され iPad 等の最新機器がまさに効果的に活用されている点や、facebook や moodle といったサイトを授業に導入して双方向的コミュニケーションを容易にしている点で共通項を感じる。ここに ICT 環境を活用した授業の最先端を見たと感じたので、以下にまずその授業実践の詳細を述べ、次にそこから見た ICT 環境を活用した新時代の教育の展望について記述したい。

2. 授業実践の詳細

木曜 2 限「実践英語」については 2011 年度以前のサイバーメディアフォーラムにおける TA の声に詳しく、火曜 3 限「地域言語文化演習（ドイツ語）」については名古屋教育ソリューションズがウェブ上に公開しているレポートに詳しいので、ケーススタディとしては火曜 1 限を詳述する。

「異文化理解を目指した英語プレゼンテーションの理論と実践」という講義題目で、その名にある通りプレゼンテーション能力の総合力を養うことの出来る授業内容となっている。ちなみに、大学院の授業ではあるが、言語文化研究科の大学院授業は 2012 年度より学部 3・4 年生も受講することが出来るようになったため、外国語学部の学部生も参加している。発表の際の使用言語をまず前期では日本語にすることで、ロジカルにかつ心に響くプレゼンテーションの方法論そのものについて学び、後期にはそれらを用いて今度は英語でプレゼンするという授業構成になっている。ウィスコンシン大学ミルウォーキー校と skype 等を通じ遠隔共同授業を行うことで、実践的に異文化コミュニケーションが行われる機会も提供される。

受講生は実際にプレゼンテーションを 4 回行っている。まず 4 月には「異文化を感じた体験」というテーマの発表で聞き手を惹き込むプレゼン術を実践し、5 月には STEPMOM という映画を基本的な題材として「white lies はあるのか」という議論でプレゼン構成とパワーポイントの作成方法を学んだ。6 月には AFP 通信が教育機関に提供している報道データベース AFP WAA の動画等を使用して、「東日本大震災」について各自テーマを選び 10 分と長めの発表を行った。AFP WAA を使ったプレゼンテーションについては、実際に AFP WAA サービスを提供している関係者が授業に訪れ、見本のプレゼンをした上で使用法のきめ細やかな説明をしてくれており、まさにコラボ授業といった感があった。7 月には映画 12 ANGRY MAN を視聴した上で「裁判員制度の是非」についてディベート形式の説得的プレゼンを最後に実施した。

この授業の最大の特徴はフィードバックが iPad という機器と facebook というサイトの両輪を用いて簡単になせるようになったことにある。プレゼンテーションは iPad で動画として撮影され、facebook のグループ機能を利用して作られた授業用ページにアッ

プロードされる。記録として動画に残ったものがウェブ上にアップロードされていることの利点は、自分で行った発表を客観的に見直すことが出来るだけではなく、動画にコメントを付けることが出来るため受講生同士のピアインタラクションがなされることにある。

また、従来は受講生しか動画を見れないようにする技術は極めて困難であったが、facebook のグループに参加した人しか見ることのできないクローズドにすることでその点も容易になったと言える。それから、facebook を利用することによって、授業者や TA にメールを出すには大袈裟に感じその勇気が出ないという人でも、メッセージで気軽に相談をしてきてくれるようになった、ということも SNS の関係性ならではの利点といえるかもしれない。さらに、今までのように授業中にビデオ映像を見て反省する時間を設ける方法ではなくなったことで、授業時間を発表そのものをする機会に当てられるばかりか、グループに入ってさえしまえばどこからでもアクセス出来るので、その場にいない遠隔共同授業校の人々からもコメントをもらうことが出来て、一石二鳥になっている。前期には実際にウィスコンシン大学の講義担当者からもコメントが付されたりした。このように、facebook グループの導入は、自分での反省、ピアインタラション、相談やフィードバックを「いつでも」「どこでも」「気軽に」行うことを可能にした。

３．ICT 環境を活用した新時代の教育の展望

iPad を利用した動画撮影では、そのインターフェースの簡単さとインカメラで自分を撮影することが出来るおかげで、発表の練習を自分だけでも行うことが出来る。そういう意味で、iPad は今度は「自学自習ツール」としても機能する。実際、火曜 1 限では実際に発表の練習をインカメラで撮影したものを見て発表の仕方を練る姿が散見された。火曜 3 限では、ドイツ語でシナリオを作って演じるという本番に向けての練習で、受講生たちがグループで会話している様子を、受講生たち自身の手で撮影して、その撮った動画を見て反省するということもなされていた。つまり、モノローグだけではなくてダイアログであっても利用価値があると言えよう。

火曜 3 限では他に、Sitepal というオンライン上の Text to speech を使って発音の概要を掴み、iPad の音声認識アプリ Dragon Dictation で「きちんと発音すれば音声が正しく文字化される」として、なんとか文字化に成功したいと学生の心に火をつけ、「たくさん声を出して発音練習をしてみたい」と思わせる工夫も同時にあった。

外国語を使ったコミュニケーション教育でスピーキングを実践的に学ぼうとする際に、練習相手が本当に側にいない一人の環境ではどうにもならなかったのが、この環境下ではそうではなくなった。動画を一人でとって自学自習することも、それを見た教員並びに受講生同士での気軽なアドバイスのやりとりも可能になったからである。

ICT 機器を含めた教育環境を整備する大学側の姿勢と、それを使用したメソッドを創意工夫する授業担当者たちの不断の努力によって、長年待望されてきた「スピーキング学習の正攻法」とでも言えるものがやっと見えつつあるのではないだろうか。

参照 Web サイト

・名古屋教育ソリューションズ　「大阪大学岩居先生講義見学レポート」
http://nagoya-cs.com/news/osaka-u-report/
・AFP WAA (World Academic Archive)
http://www.afpwaa.com/